【別添１】

20	信州大学教育学部附属松本中学校　外２校（園）	H28～R1

令和元年度研究開発実施報告書（要約）

１　研究開発課題

本研究開発の目的は，持続可能な開発のための教育として，「たくましく心豊かな地球市民」を育むために，自己表現力・課題探究力・社会参画力を軸として，様々な資質・能力を有機的・総合的に育む，幼小中一貫教育としての教育課程／指導・評価を開発することである。

本学校園では，これまでに教科や道徳・総合的な学習の時間等に関する数多くの研究実績を積み重ねてきたが，ともするとそれらが各学校園における取組の実現にとどまり，幼小中を貫く系統的な展開がなされていない傾向が見られた。そこで私たちは，本研究開発を通じて，各校園の実践に通底する本学校園の教師の指導観やそれに基づく実践を精査し，学びの主体者である子どもの 12 年間の豊かで確かな学びを支えようとしてきた。

「たくましく心豊かな地球市民」とは，本学校園が目指す心身ともにたくましく，心豊かで国際的・地球的な視野をもち，かけがえのない生命と地球を守り，社会・人類の幸福に尽くすことができる人間である。「たくましく心豊かな地球市民」となるために，次の３つの生き方を実践し，人類共通の豊かな人間性を育てることを目指している。

・自主：自ら求め，そのことになりきる生き方に努める人間
・創造：自ら考え，つくり出そうとする生き方を育む人間
・愛他：自らを省み，他を思いやり，自他ともによりよく生きようとする人間

これらの生き方を実践するよう努め，様々な資質・能力を有機的・総合的に育むことができるようにしようとしてきた。

そのとき，私たち幼小中の教員がまず足場としたのは，子どもはそもそも「たくましく心豊かな地球市民」であり，「地球市民」としての様々な資質・能力をもともともっているという考え方である。さらに，子どもがもっている資質・能力のうち，本学校園の子どものよさとして特に顕著に見られる「自己表現力」「課題探究力」「社会参画力」を『３つの力』として共有し，校種を越えた教員が協働して実践研究に取り組んできた。目の前の子どもの姿から見いだした『３つの力』を，幼小中を通じて，私たちが子どもの育ちを見るための共通の視点にしながら，この『３つの力』を軸とし，様々な資質・能力を有機的・総合的に育むための幼小中一貫教育の教育課程及び指導・評価を開発していくことを課題とした。

また，先に挙げた３つの生き方についても，「自主」の生き方は主として「自己表現力」を軸として，「創造」の生き方は主として「課題探究力」を軸として，「愛他」の生き方は主として「社会参画力」を軸として，12 年間継続して実践を促したり育ちを捉えたりするよう努めながら，教育課程の評価改善を行ってきた。

なお，本研究開発は，本研究開発課題への取組により，幼小中一貫の包括的な教育課程の提案／ミッションの再定義に基づく附属学校園の機能強化も期待している。

２　研究の概要

本学校園では，平成 28 年度～平成 31(令和元)年度までの４年間の研究開発の実践を通して，『学びの総合化』を具現化するための 12 年間の教育課程の編成に取り組み，全体像とそれを支える教員のスタンスやカリキュラム・マネジメントを示すことができた。領域を新設したり子どもの発達に応じて探究的な学びを支援したりしながら，『学びの総合化』を実現する教育課程を編成できたことは，大きな成果であった。幼・小・中を貫く教育課程を編成することは，校種を超えた教員の連携や交流を活性化して保育・授業や子ども見るまなざしの変化を促し，育成する資質・能力についての共有ビジョンの形成や授業改善を進める効果も生んだ。

また，授業改善を進めることで，子どもの学習状況に変化が見られ，知識・技能の確かな定着や，思考力・判断力・表現力等や関心・意欲・態度等，学びを深めたり学びに向かう力が育まれたりするという成果があった。

３　研究開発の経緯

年次ごとの実施内容の概要を，次の表に示す。

表１　年次ごとの実施概要

	研究開発の実施内容等　※主なものを掲載
第一年次（平成二十八年度）	**PLAN　特別の教育課程の編成・実施に向けた準備** ●『学びの総合化』の【遊びの視点】／【学びの領域】／教科「英語」「技術」の新設／【教科等の総合化】について，文部科学省や教育研究開発企画評価会議協力者の指導助言を踏まえ，その位置付け，目標，内容，評価方法等について詳細に検討し，幼小中全教職員で共有した。 ➢ 【遊びの視点】の意味・役割 ➢ 小学校低学年における【学びの領域】（「ことば」，「かがく」，「くらし」，「ひょうげん」） ➢ 小学校高学年における教科（「英語」，「技術」） ➢ 中学校における【教科等の総合化】の試行（理科を中核に） ●全国学力・学習状況調査の結果分析　国語，算数・数学のＢ問題の結果から，【教科等の総合化】の実態を把握した。
第二年次（平成二十九年度）	**DO　特別の教育課程の実施** ●『学びの総合化』のうち，幼稚園における【遊びの視点】の導入と，学びの萌芽を緩やかに統合する【学びの領域】の設置に焦点化して教育課程を編成・試行・評価／改善した。 ●小学校における【学びの教科化】として新教科「英語」「技術」の教育課程について検討するとともに一部を試行した。 ●中学校における【教科等の総合化】として，理科・数学・技術の「教科横断的な学習」を一部試行した。 ●幼小中一貫教育課程として，総合的な学習の時間を通してどのような力を育むか，その最終学校段階である中学校における総合的な学習の時間の特色は何であるべきかという視点から検討した。 ●幼小中一貫教育に関する公開研究会の開催（隔年開催）学外の教育学研究者及び来校者による本研究開発校の評価をした。 ●全国学力・学習状況調査の結果分析　国語，算数・数学のＢ問題の結果から，【教科等の総合化】の実態を把握し，経年変化に基づいて改善点を特定した。
第三年次（平成三十年度）	**DO　特別の教育課程の実施** ●幼稚園における【遊び】の視点の捉え直しと，学びの萌芽を緩やかに統合する【遊びの領域化】について，改善された教育課程を実施した。 ●小学校における【領域の教科化】として新教科「英語」「技術」の教育課程を全面実施するとともに，評価・改善した。 ●中学校における【教科等の総合化】として教科等の横断的な学習の充実に焦点化して教育課程を編成・試行・評価／改善した。 ●『学びの総合化』を枠軸とする幼小中一貫教育課程として，「総合的な学習の時間」（小中６年間）で育成する力や小中の特色について検討した。「総合的な学習の時間」で育成される力の評価方法についての検討を開始した。 ●幼小中一貫教育に関する保育・授業公開（信州ラウンドテーブル）を開催した。 ●全国学力・学習状況調査の結果分析　国語，算数・数学のＢ問題の結果から，【領域の教科化】及び【教科等の総合化】の実態を把握し，昨年度，特定した経年変化に基づく改善点について検証した。
第四年次（令和元年度）	**CHECK & ACTION　特別の教育課程による成果の評価** ●『学びの総合化』の教育課程を全面実施した。 ●幼小中共通のテーマでの公開研究会を同一日に開催し，学外の教育学研究者及び来校者の意見等に基づき，本研究開発の評価を行った。 ●『学びの総合化』の成果について，特に【遊び】／【遊びの領域化】／【領域の教科化】／【教科等の総合化】による効果・限界に基づいて，以下の方法によって評価した。 ➢ 全国学力・学習状況調査の「国語」，「算数・数学」，質問紙の結果分析による実態の把握と効果／改善点の検証 ➢ 【遊び】，【遊びの領域化】，【領域の教科化】，【教科等の総合化】の導入に関するアンケートの実施と経年変化の分析による検証をした。（実施時期：６～７月　対象：子ども，保護者，本学校園教員） ➢ 公開研究会来校者に対する，効果の波及に関わった追跡調査をした。 ➢ 【遊びの領域化】及び【領域の教科化】に関わる児童への聞き取り調査をした。 ➢ 【教科等の総合化】に関わる生徒の自由記述調査をした。

４　研究開発の内容

（１）「たくましく心豊かな地球市民」を育む 12 年間の教育課程『学びの総合化』

①子どもがもともともっている資質・能力の強みを生かして教育課程を編成する

子どもがもともともっている資質・能力の強みである『３つの力』を視点に子どもの姿を見ていくと，子どもは自分の『思いや願い，問い』をもとに，とことん活動に打ち込んだり，とことん追究したり，探究したりしていることがより鮮明に見えてきた。そして，他の資質・能力の要素を巻き込みながら，豊かに学んでいけることが見えてきた。こうした見方を共有しながら私たちは，「たくましく心豊かな地球市民」に向けて「『思いや願い，問い』をもとに，やりたいことや目標に向かって『３つの力』を発揮している学び」を幼小中 12 年間通して支えるための教育課程を編成しようと考えた。

②「子どもに内在する資質・能力『３つの力』」と資質・能力の「三つの柱」

私たちは『３つの力』を，子どもに内在する資質・能力のうちの強みとして見いだした。

子どもは自分の強みを生かし，資質・能力の他の要素を巻き込みながら学び（**図１**），問題解決の手順や方法を自覚し，整理し，どの状況で使えるか判断しながら，より質の高い問題解決を行うことができるようになってきている。

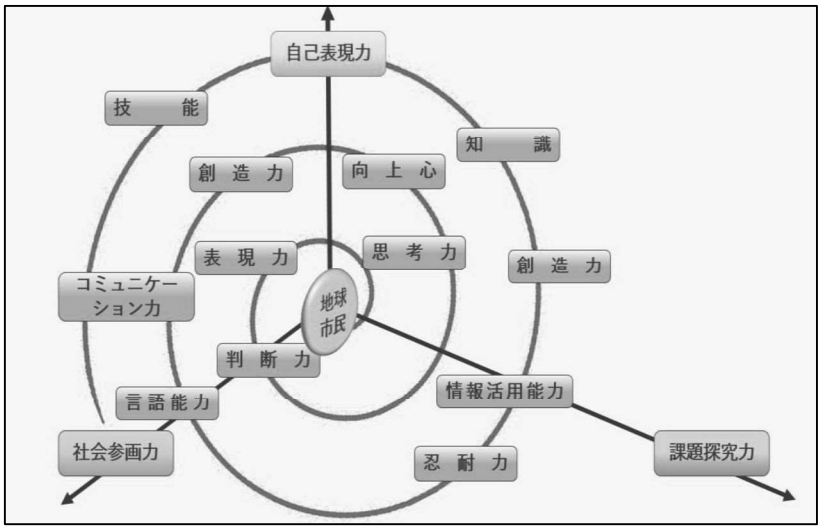


図１　様々な資質・能力を巻き込みながら学ぶイメージ

従って，そのような学習状況の評価に当たっては，資質・能力の「三つの柱」（「生きて働く知識・技能の習得」「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成」「学びに向かう力，人間性等の涵養」）に基づいている。その上で，子どもの『思いや願い，問い』に基づく学習を構想するために，その時々の子どもの状況を『３つの力』を視点に捉え単元構想をするという実践を行っている。

③子ども側の視点に立った授業づくり

ア　子どもの『思いや願い，問い』を大切にした学び

子どもが，『３つの力』を発揮できるようにするために，教師はこれまで本学校園において暗黙の了解であった子どもの『思いや願い，問い』を大切にすることが必要である。

イ　育む資質・能力を明確にした教師の意図的・計画的な支援

子どもが，『３つの力』を発揮しながら，問題解決することができるように，教師は適切な場や状況を設定し（カリキュラム，意図的・計画的な学習指導），働きかけをする（授業設計，問い・題材）ことが必要である。

④校種を越えた教師が協働して 12 年間の子どもの育ちを支える

本学校園の教員は，校種を越え「子どもがもともともっている資質・能力の強みを生かして教育課程を編成すること」を目指してきた。教師は子どもに内在する資質・能力『３つの力』と資質・能力の「三つの柱」の関係をとらえ，「子ども側の視点に立った保育・授業づくり」を実践してきたことで，学び手である子どもが，自身のよさを生かして学ぶことがわかってきた。これらにより，子どもは『３つの力』を発揮し，その強みを強化しながら，様々な資質・能力を有機的・総合的に育んでいくことができる。

（２）『学びの総合化』における 12 年間の教育課程

子どもの発育発達や学び方の特徴に応じ，『思いや願い，問い』をもとに，『３つの力』を軸として資質・能力を養う，長期的な教育課程が必要と考え，【遊び】（幼稚園４～６歳期）【遊びの領域化】（小学校低学年７～９歳期）【領域の教科化】（小学校高学年 10～12 歳期）【教科等の総合【教科等の総合化】（中学校 13～15 歳期）の 12 年間を一貫して「たくましく心豊かな地球市民」の学びを支えようとしている。（図２）

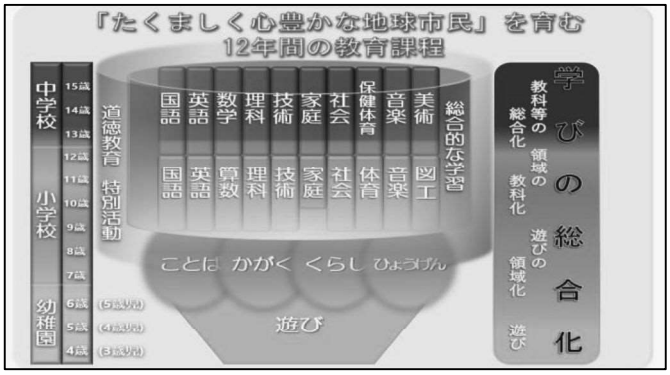
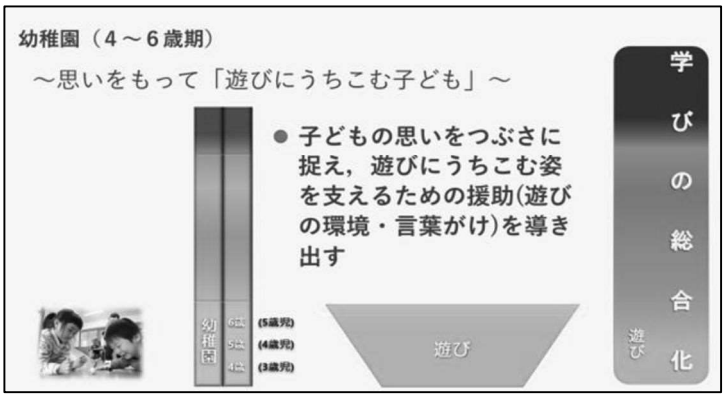


図２　本学校園の教育課程『学びの総合化』の全体像

（３）４～６歳期（幼稚園）【遊び】

①「遊びにうちこむ子ども」を支えるために

これまで子どもの『思いや願い，問い』を捉えていながら，子どもの自発性を重んじようとするあまり，教師が前面に出すぎない援助をすべきだという型にはまってしまうこともあった。そこで，子どもが遊びにうちこめるように，教師にできることは何かを子どもの事例からもう一度考えてみることとした。



②子どもの思い，姿をつぶさに捉える努力が，援助の方向や方法を示唆する

子どもの事例から，継続的に子どもの内面に目を向け，どのような思いで遊んでいるのか，どんな心の動きがあるのかを観て遊びの可能性を拓いたり深めたりする時を掴む努力をすることが大切なことであると改めて気付かされた。そこで，私たちは改めて「遊びにうちこむ子ども」をより豊かに支えていけるように，「遊びにうちこむ子ども」の姿をもう一度見つめ直し，子どもの思い，姿をつぶさに捉えるために何ができるのかを考えていくこととした。

③どのように『思い』をつぶさに捉え，「遊びにうちこむ子ども」を支えていくのか

ア　複数の目でより多くの子どもの思いを捉えていく

複数の目でより多くの子どもの思いを捉え，学級の子ども一人ひとりがどんな思いで遊んでいるのかを理解し，援助できるように研究を進めていくことにした。

イ　長期的な視点で子どもの変容を捉えていく

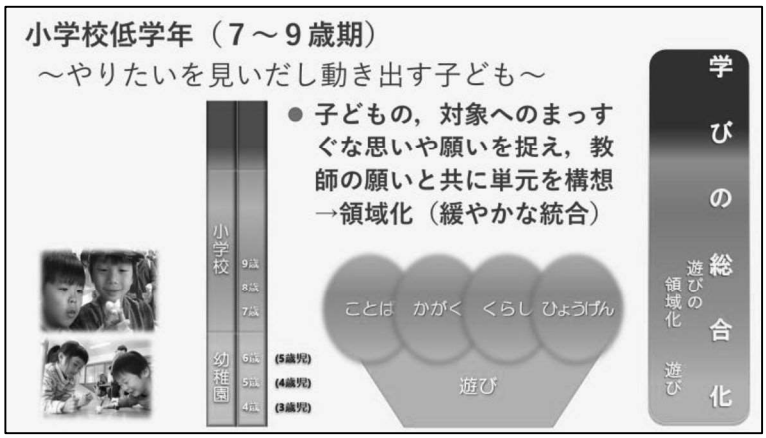
遊びにうちこむ子どもの姿を長期に記録し，その子のこだわりや遊びの傾向，変容を捉えていくことで，一人ひとりの子どもがどのような育ちをしているのかを多角的・多面的に考えることができるのではないかと考えた。そして，そのような見方・考え方を生かして，教師の援助も見直していけるのではないかと考え，これまでの１時間の保育で子どもの思いや姿を捉えていくことに加え，学期ごとに子どもの思いや姿を振り返る機会を設け，援助の充実に努めた。

④今後について

今後も，「遊びにうちこむ子ども」を支えていくために，子どもの思いや姿，育ちを様々な視点，方法から捉えていき，教師自身の援助のあり方を考えていく。また，その中で資質・能力がどのように育まれているのか，教師一人ひとりが子どもの遊びをどのように援助しているのかを分析し，言語化していく必要がある。

（４）７～９歳期（小学校低学年）【遊びの領域化】

①“遊び”に関する共通理解



【遊びの領域化】部会，幼小接続ワーキングチーム（ＷＴ）では，幼児期の子どもにとっての“遊び”の意義と，幼児期の子どもにとっての“遊び”と小学校低学年段階における子どもにとっての“学び”のつながりについて継続して検討してきた。第４年次は，子ども自身が積み重ねてきている幼児期からの育ちを子どもの一貫した成長の過程としてみるという認識を改めて共有し，幼稚園と低学年双方の子どもの自発的な“遊び”を見合い，類似点や相違点を話し合った。子どもの育ちはつながっているだけでなく，その子ならではの育ちが様々な方面から総合的に培われていると捉えるようになった。よって，【遊びの領域化】における“遊び”は，「子どもの自発的な活動から育まれる総合的な学び」として共通理解を図った。

②【遊びの領域化】の再整理と意義

【遊びの領域化】の概念を，「子どもが，幼児期の遊びで培ってきた個々の学びをもとに，成長に伴って広がる新たな環境でも主体的に追究し，各教科等の特質に応じた学びに緩やかに統合していく中で，『３つの力』を発揮することができるよう，教師が，各教科等の内容を概観して単元構想したり，活動内容を十分保証できる環境を構成したり，活動の意味や価値を位置付けられる場を設けたりして指導・支援する段階」と再整理した。子ども，教師にとっての意義として，以下を見いだした。

ア　追究の素地を育み，学びをつなげていこうとする子ども

子どもは，自らの育ちから徐々に生じる遊びの有機的な関連を，各教科等の本質や系統に緩やかに統合した「領域」で実現することで，『３つの力』を十分に発揮できる場が保証され，自らの主体的な追究の意味や価値を意識して取り組むようになっていく。主体的な探究を通して『３つの力』を育み，学ぶ喜びを見いだし，再び『３つの力』を発揮できる新たな探究へと自らの学びをつなげていこうとする。

イ　『３つの力』の発揮を支えていく教師

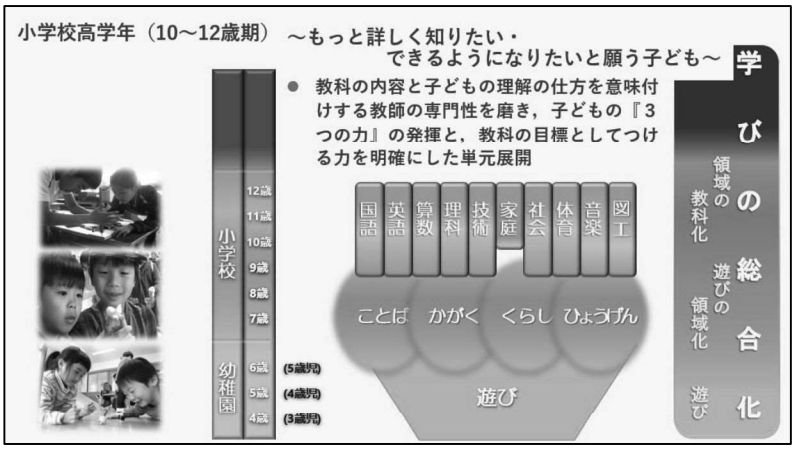
教師は，教材の選定や単元構想の段階で『３つの力』を【遊びの領域化】に寄せて具体化し，子どもを観る視点をもって授業に臨む。想定を超える子どもの豊かな発想や言動を柔軟に受け止め，価値付けられるようになったり，子どもの事実を基に教材や単元展開を見直すことで対象の本質的な部分に迫っていくための学習環境をつくれるようになったりする。教師が，子どもの学びを柔軟に捉え応じていくことを根幹に，学びの見きわめと保育者の視点を意識した環境構成，複数の領域をまたぎながら試行錯誤できる単元構想，特定の領域を発展させたり深めたりできる単元構想，追究の過程を共有する場の設定等により支えていくことで，子どもの『３つの力』の発揮が具現化してきている。

③今後の方向

実践を通して，４つの領域それぞれの独自性や関係性，幼稚園教育要領５領域のねらいや内容とのつながり，領域の限界と教科への分化等について，幼稚園教員，大学教員，長野県教育委員会等を交えたＷＴで検討していく。

（５）10～12 歳期（小学校高学年）【領域の教科化】

①【領域の教科化】の必要性



子どもの「もっと追究したい」という思いや願いは，日常の生活経験だけでは到達しがたい科学的認識の深まりを求めている。子どもの『思いや願い，問い』の実現や解決を目指すからこそ，より教科の本質に迫る『思いや願い，問い』が子どもの中に発生してくる。 教師は，教科の内容と子どもの理解の仕方を意味付けする専門性を磨き，子どもの『３つの力』の発揮と，教科の目標としてつける力を明確にした単元展開が必要である。

【領域の教科化】では，子どもの『思いや願い，問い』に柔軟に応じながらも，育成すべき資質・能力を明確にし，『３つの力』を発揮できるような学習場面を設定することを考えてきた。子どもは，『思いや願い，問い』をもち教科の系統性を感得し，『３つの力』を発揮することを通して，習得した知識・技能を活用し，物事を相互に関連付けて理解したり，課題を解決したりしていくことができる。

②領域からつながる子どもの捉え

領域での実践を行う同僚の喜びや迷いを含めた営みの中に，【領域の教科化】における子どもの捉え方を学ぶことができる。領域での子どもと教師の営みを信じられるからこそ，教科においても子どもの学びを支えることができる。

③教科の内容と子どもの理解の仕方を意味付けし，その質の変容を促す授業づくり

子どもの『思いや願い，問い』に柔軟に応じながら，子どもが『３つの力』を発揮し，各教科の資質・能力を育成できるような意図的・計画的な題材提示や支援を考えていく授業づくりが必要である。その視点として以下３点を考えてきた。

◆固有の教科を選択し，問題解決の場面を設定する授業づくり

◆固有の教科をより発展させ，問題解決の場面を設定する授業づくり

◆複数の教科を組みあわせ，問題解決の場面を設定する授業づくり（教科と総合的な学習の時間のつながり）

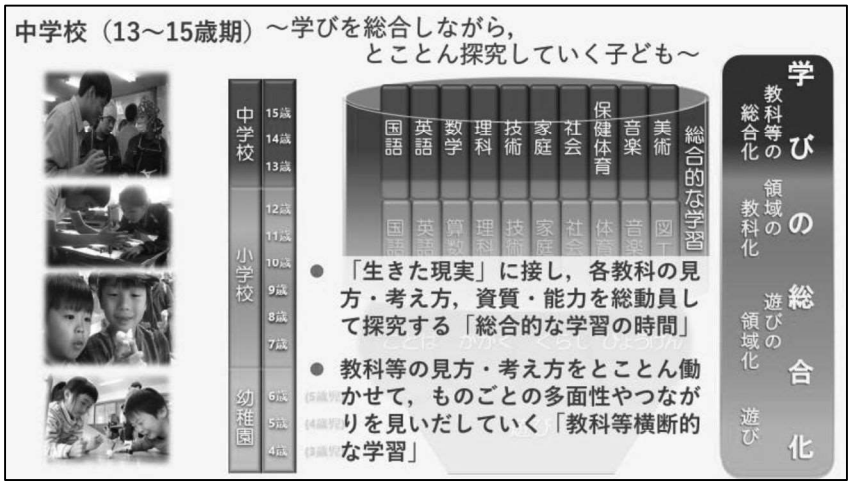
④子どもと共に育ちを実感し，授業づくりに活かす評価

子どもが自分の『３つの力』の育ちを自覚化できるように，定期的な振り返りの場を設定するとともに，その蓄積を行っていく。教師と子どもとで振り返りを共有することで，子どもは『３つの力』の育ちを実感し，教師は子どもの理解の程度を知る機会となり，また，その後の探究と単元展開の方向性を探る指標とすることができる。

⑤今後について

今後は，『３つの力』の評価の妥当性を高める研究や，それぞれの教師が子どもの学びをどのように支えているのかを分析し，教師の行っている指導や支援のあり方を体系化していく必要がある。

（６）13～15 歳期（中学校）【教科等の総合化】



中学校では，社会の入り口に立つ中学生が『３つの力』を発揮し，各教科等の見方・考え方をとことん働かせながら，様々な資質・能力を有機的・総合的に活用し，生きた現実と対峙できる力を育む。そのために，生徒の『思いや願い，問い』から発し，生徒が教科等の枠にとらわれず，学びの場・方法・内容を総合しながらとことん探究できるよう，「総合的な学習の時間」と「教科等横断的な学習」の充実を柱にした【教科等の総合化】を推進してきた。

①中学校での「学級総合」の充実　～みんなで打ち込み探究する～

「総合的な学習の時間」は学習単位を学級としており，「学級総合」と呼んでいる。３年間というスパンで，その活動に打ち込む探究の中で，『思いや願い，問い』を変容させながら，生徒は何度も探究のサイクルを展開していく。そして，生徒とともに教師も探究の主体者へと意識を更新していく。

ア「学級総合」のねらいと概要

「もの・ひと・こと」との関わりを通して実生活や実社会から課題を決め出し，級友と協働しながら課題解決に向け探究し続ける。『３つの力』を軸に，様々な資質・能力を活用し，実践を通して「地球市民」としての生き方を身に付けていく。

イ「学級総合」の運営

中学校では各学級担任が３年間の活動で育みたい生徒の姿とそのために考えられる活動の見通しを「総合カレンダー」として表している。教科担任は学級総合との関わりを意識した教科の授業を展開し，教科と学級総合の学びが往還できるようにカリキュラム・マネジメントを行っている。

②教科等横断的な学習　～教科等の枠を越えて探究する～

ア　教師が意図的に「学級総合と教科等」「教科等と教科等」を結んでいく

生徒が教科等の枠を越えて学びを深めていくことができるように，「教科等横断的な学習」を意図的に仕組む取組が進められてきた。

イ　とことん見方・考え方を働かせていくと，つながりが見え，教科等の枠が外れて総合化していく

生徒が，学習対象に対してとことん見方・考え方を働かせることで，対象を多面的・多角的に捉えたり，「つながり」を見いだしたり，対象を新たな意味や価値で捉え直したりすることができるようにする。そのような生徒の姿を支えたり，生徒自身で自覚化できるようにしたりすることが，各教科等の見方・考え方，資質・能力を総動員する，より深い学びに向かっていくと考える。

③今後の方向

「見方・考え方」の視点から小中接続をどのように捉えていくか，【教科等の総合化】における評価のあり方についてもさらに検討を行っていく。

（７）子どもの育ちを土台とした幼小接続

幼稚園や小学校は，育ちや学びの場であり，子どもは幼稚園や小学校での学びをつなぎ続けて育っていくとの認識を，幼小教員が共有し実践に臨むようにしてきた。子どもの育ちを視点としたことで，保育や授業での支援・指導に子どもにとってのつながりが意識され，学びの場づくりや声掛け，教材化への視点等に活かされるようになってきている。

（８）小中接続を保証していくカリキュラム構想

小学校での「英語科」「技術科」の新設に伴い，小中担当教員及び大学教員でＷＴを設け，「小中連携教育カリキュラム」を構想および実践を重ねてきた。英語科では，小・中の教師が互いに授業観や小中一貫の到達目標などについて議論をし，目指す子どもの姿や支援について具体的に検討しながらカリキュラムづくりを進めてきた。技術科では，「技術感」から「技術観」へと高まっていく子どもがはたらかせている見方・考え方のよさを捉え，支えていくカリキュラムづくりを進めてきた。

（９）必要となる教育課程の特例

①小学校低学年における，「学びの領域（ことば｜かがく｜くらし｜ひょうげん）」新設への対応
②小学校高学年における，教科「英語」「技術」新設への対応
③中学校における，「総合的な学習の時間」や「教科等横断的な学習」の充実への対応

５　研究開発の結果及びその分析

（１）児童・生徒への効果

①自己表現力・課題探究力・社会参画力に関して

ア　全国学力・学習状況調査　質問紙から

それぞれの観点の意識が，おおむね高まっていることがうかがえる。特に昨年課題としてあげた，小学校では自分の考えを自分なりに表現することはできるが，相手に伝わるよう工夫したり，より確かな説明をしたりするという自己表現力の点は大きな改善が見られた。

イ　全国学力・学習状況調査　国語Ｂ（Ｒ１は国語）・算数数学Ｂ（Ｒ１は算数数学）の結果から

年度毎の実態の差こそあれ，全国平均を大きく上回り，高水準を維持しているとみることができる。また，正答数の分布の状況が改善し，学力差が縮まり正答数の多い方にまとまってくる傾向が明らかとなった。これらのことから，自己表現力・課題探究力・社会参画力の育成を図ってきたことによる成果を伺うことができる。

ウ　自己評価アンケートの結果から

・３～５（６）歳児

これまでは，短いスパンの中で子どもの遊びの姿を見ていくことを中心に取り組んできた。その中で，子どもの遊びの姿を見ていくと，次への見通しを持ったり，友だちと協力したりするような『３つの力』に関わるより具体的な姿が見えてきている。そのような子どもの変容を，短いスパンではなく，１ヶ月や学期単位のような長いスパンの中で捉えていく必要性を感じている。

・６～８（９）歳児

自己表現力と課題探究力は伸びているが，社会参画力は減少した。６～８（９）歳児では，広く４つの領域を設けると共に，「子どもの願いや問いを大切にした活動」を位置付けている。カリキュラムでは，子どもが，自らが抱いた願いや問いを実現・解決しようと，「もの・ひと・こと」に働きかけようとする際に，働きかける「枠」を狭いものとせず，広いもので捉え，とことんまで追究していくことを保証している。これらを継続してきたことが，『３つの力』の高まりにつながっているものと考える。

・９～11（12）歳児

自己表現力と課題探究力は伸びているが，「学びを社会に生かす」という点での社会参画力は減少している。９～11（12）歳児では，広く４つの領域で学んだことを，より深く学ぶために教科を位置付けている。カリキュラムでは，指導要領で位置付けられている教科だけでなく，子どもの願いや問いを解決するために，新たに「技術科」「英語科」も設けている。このようなカリキュラムを仕組むことで，とことんまで教科を追究していくことを保証している。これらのことが，『３つの力』の高まりにつながっているものと考える。

・12～14（15）歳児

４年間のアンケート結果の変化を見ていく中で，大きな変化を見せている項目が，課題探究力の「課題に対し最後まで粘り強く追究する力」，自己表現力の「伝える方法を工夫して表現する力」，社会参画力の「学びを社会に生かす力」である。この結果から，課題に対して粘り強く取り組む学習を通して，友や地域に発信していく必要性が生まれ，それをどのように伝えるか表現をより工夫していく中で，自らの学びを生かしていく有用感を感じていくなど，『３つの力』が関連付けられながら伸びているのではないかと考える。

②領域設置に関して

ア　児童アンケートから

入学以前に自分の願いや思いで行動できていた子どもたちは教科という枠にあえてはめられると，半分程度の子どもが自分の思いや願いを隠し活動している実態がみえてきた。半数を超える児童がそう感じていることを考えると，小学校の子どもたちにとって領域を設けたことは実態にあっていると考えている。

③教科化を進めることに関して

領域という広い枠で学習することに価値を感じているが，成長が進むにしたがって，教科にのめり込む時間を求めていく子どもの実態がみえてきた。さらに，４年になって実際に教科を学習してみると教科にのめり込む楽しさを感じている子どもの実態も見えてきた。

④技術科に関して

ア　技術科設置について児童アンケートの結果から

「低学年のときに，買った製品を自分で作ってみたいと思ったことがある。」という質問項目に関して，４～６年の児童に聞いたところ，「とても当てはまる」「やや当てはまる」と回答した子どもは昨年度 75%，本年度も 77%いたことが分かった。本学校園の子どもにとって小学校４年から技術科を新設していくことは実態にあっていると考えている。

⑤英語科に関して

ア　英語科設置について児童アンケートの結果から

「低学年のときに，英語を話せるようになりたいと思ったことがある。」という質問項目に関して，４～６年の児童に聞いたところ，「とても当てはまる」「やや当てはまる」と回答した子どもは昨年度 77%，本年度も 81%いたことが分かった。本学校園の子どもにとって小学校４年から英語科を新設していくことは実態にあっていると考えている。

（２）教師への効果

本学校園の 12 年間の特別の教育課程が本学校園の子どもにとって有意義なものになっていると感じている教師が９割超おり（昨年は８割），「当てはまらない」と回答した教師は昨年同様いなかった。この特別な教育課程が子どもにとって意義あるものであることを感じながら研究開発に取り組む教師が多いことが分かった。

（３）保護者等への効果

本学校園が，幼小中を一貫する特別な教育課程を編成しようとしていることや，『３つの力』を育む授業に取り組む姿勢に理解を示していることがうかがえる。今後もさらに丁寧に，目指す教育課程については必要な情報を十分に提供したり，繰り返し説明したりしていく必要がある。

（４）外部への効果

①公開研究会参加者アンケートの結果から

本年度，本学校園公開研究会にて，本研究の成果や課題等を見いだすために，参加者にアンケートを行った。「本研究を保育・授業づくりに活かすことができそう（約 80%）」という結果で，保育・授業改善への効果があったことを確認できた。また，本研究の『３つの力』について，「よいと思う（約 65%）」という結果で，ある程度の理解や共感を得ることができたが，評価に関わる部分や一般性については，課題も残っている。

②公開研究会参加者への追跡調査の結果から

本年度，公開研究会アンケートに記述された内容を踏まえて，本研究がその後どのように活用されているのかを把握し，今後の研究に活かしていくために，公開研究会の参加者の追跡調査を行った。本研究が，教材開発や授業づくり等に活用されていることや，子どもの学びの捉え方に変容をもたらしていることが確認できた。

６　今後の研究開発の方向

（１）研究開発全般について

①本学校園 12 年間の教育課程編成全体に関わって

ア 子どもにとっての学びのストーリーの明確化と体系化

イ 子どもの学びやカリキュラムの効果をより信頼性・妥当性をもって評価する方法の開発

②幼小中全職員・ＷＴ所属の大学教員による，持続可能でより充実した協働体制づくり

ア 幼小接続【遊びの領域化】ＷＴの充実

イ 小中接続教科等ＷＴの充実

ウ 領域や教科等の間の連携性・関係性の明確化

エ 共有ビジョンの形成に至る過程を支えるためのコミュニティづくりとその運営

（２）幼小接続に関わって

①４～６歳期（３～５歳児：幼稚園）における，【遊び】について

ア 【遊び】を通して育まれる，資質・能力の捉え

イ 『学びの総合化』における【遊び】の共有

②７～９歳期（小学校低学年）における学びを緩やかに統合する【遊びの領域化】について

ア　低学年期の学びを概観した『３つの力』の保証

イ　低学年期の育ちに応じた信頼性・妥当性のある評価の確立

（３）小中接続に関わって

①10～12 歳期（小学校高学年）における，【領域の教科化】について

ア　各教科固有の見方・考え方と『３つの力』との関係性の検討

②ＩＣＴ支援員と外国語指導助手（ＡＬＴ）の加配の必要性

③「教科をつなぐ指導観」「見方・考え方」を視点にした小中接続

ア「見方・考え方」，資質・能力の「拡充・洗練・顕在化」から見た子どもの姿の捉え

イ 各教科における「指導観」とより具体的なカリキュラム構想

（４）13～15 歳期（中学校）における，【教科等の総合化】に関わって

①「遊び」「領域」での学びを発揮できる教師の子ども観と子どもに関わる情報の共有

② 総合的な学習の時間

ア　小学校，中学校の総合的な学習の時間の連続性や質的な違いと接続のあり方

イ　総合的な学習の時間の運営と評価法

③教科等横断的な学習

ア　教科・領域の見方・考え方を意識化・自覚化できるようにするための具体的な支援のあり方

（５）その他

①他学校園の視察の継続

②ＩＣＴ環境の充実

【様式3】

信州大学教育学部附属松本中学校　教育課程表（令和2年度）

	各教科の授業時数									道徳	総合的な学習の時間	特別活動	新設教科	総授業時数
	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健体育	技術・家庭	外国語					
第１学年	140	105	140	105	45	45	105	70	140	35	85 (+35)	35		1,050 (+35)
第２学年	140	105	105	140	35	35	105	70	140	35	105 (+35)	35		1,050 (+35)
第３学年	105	140	140	140	35	35	105	35	140	35	105 (+35)	35		1,050 (+35)
計	385	350	385	385	115	115	315	175	420	105	295 (+105)	105	0	3,150 (+105)

別紙２

学校等の概要

１　学校名、校長名

信州大学教育学部附属松本中学校（しんしゅうだいがくきょういくがくぶふぞくまつもとちゅうがっこう）　　校長（こうちょう）　越智康詞（おちやすし）

２　所在地、電話番号、ＦＡＸ番号

長野県松本市桐 1 丁目 3 番 1 号　電話 0263-37-2212　FAX 0263-37-2226

３　課程・学科・学年別幼児・児童・生徒数、学級数

第１学年		第２学年		第３学年		計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
157	4	156	4	160	4	473	12

４　教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1	1	2	—	15	—	1	—	—	3

ＡＬＴ	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計
2	1	2	—	29

学校等の概要

１　学校名、校長名

信州大学教育学部附属松本小学校　　校長　越智康詞

２　所在地、電話番号、ＦＡＸ番号

長野県松本市桐 1 丁目 3 番 1 号　電話 0263-37-2216　FAX 0263-37-2217

３　課程・学科・学年別幼児・児童・生徒数、学級数

第１学年		第２学年		第３学年		第４学年		第５学年		第６学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
69	2	73	2	72	2	71	2	67	2	62	2	414	12

４　教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1	1	1	—	12	—	1	—	—	2

ＡＬＴ	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計
1	1	2	—	23

学校等の概要

１　学校名、校長名

信州大学教育学部附属幼稚園　　園長　越智康詞

２　所在地、電話番号、ＦＡＸ番号

長野県松本市桐 1 丁目 3 番 1 号　電話 0263-37-2214　FAX 0263-37-2215

３　課程・学科・学年別幼児・児童・生徒数、学級数

年少		年中		年長		計	
園児数	学級数	園児数	学級数	園児数	学級数	園児数	学級数
30	1	32	1	28	1	90	4

４　教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1	—	—	—	4	—	1	—	—	3

ＡＬＴ	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計
1	1	2	—	12